

令和6年度第1回大阪府総合教育会議

議事録

日 時 令和6年12月26日（木）午前11時00分から午後0時20分まで
場 所 本館2階 第二委員会室
出席者 知事 吉村 洋文
教育長 水野 達朗
教育委員 中井 孝典
教育委員 尾崎 えり子
教育委員 竹内 理
教育委員 森口 久子

1. 開会

(司会・野村企画室長)

- ・ただいまから、令和6年度第1回大阪府総合教育会議を開催いたします。
- ・皆様にはお忙しい中、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。
- ・私は進行を務めます、大阪府政策企画部企画室長の野村でございます。よろしくお願いいたします。
- ・本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4の規定に基づき設置しております。
- ・本会議は公開で行い、インターネットによる配信をしております。資料につきましては、机上の端末にてご覧ください。
- ・それでは、本日のご出席者の皆様をご紹介します。吉村知事でございます。水野教育長でございます。中井委員でございます。尾崎委員でございます。竹内委員でございます。森口委員でございます。なお、井上委員におかれましては、本日ご欠席でございます。

2. 議事 府立高校改革の方向性について

(司会・野村企画室長)

- ・それでは、早速議事に移ります。
- ・本日は、「府立高校改革の方向性について」を議題といたします。
- ・本年8月、大阪府学校教育審議会において、「府立高校改革の具体的な方向性等について」の答申が示されました。普通科高校の特色化、魅力化や子どもたちのニーズの多様化への対応などが、解決すべき課題として挙げられました。
- ・これを踏まえまして、本日は、「府立高校改革の方向性について」意見交換をしたいと思います。
- ・それでは資料3により、教育庁からご説明をお願いします。

(教育庁)

- ・教育振興室長仲谷でございます。私の方からご説明をいたします。
- ・資料3の4ページになります。資料をご覧ください。
- ・まず、大阪の高校教育の現状を話した上で、府立高校改革の方向性をご説明したいと考えております。
- ・次のページ、先ほど申し上げました府立高校の現状についてご説明をいたします。2ページでございます。
- ・まず、進学状況です。左下のグラフをご覧くださいますと、高等学校進学率がほぼ100%という形になってございます。
- ・右のグラフをご覧くださいますと、大学等の進学率と一番下のところから二つ目ですけども、点線で説明しております専修学校の進学率を加えますと、86.2%ということになってございまして、だいたい9割弱が大学等に進学しているという現状でございます。
- ・次のページをご覧ください。
- ・高校入学時点についての資料になります。右の方をご覧くださいますと、公私の受け入れ割合を書いておりますが、平成28年から令和6年まで、ほぼ同程度で推移しているのは見ていただけると思います。

- ・一方、右のグラフですけれども、通信制高校の進学率が、平成 28 年には 3.1%だったのが、令和 6 年には 7%ということで、2 倍以上になってございまして、こちらについてはまた後ほども触れさせていただきたいと思っております。
- ・次のページをご覧ください。
- ・ニーズについて、左のグラフをご覧くださいますと、普通科と総合学科の倍率を示させていただいてありますが、近年、普通科・総合学科については、いずれも 1 倍を超えている現状でございまして、右の方のグラフをご覧くださいますと、普通科と総合学科合わせますと、65.5%になりますので、普通科の改革が必要じゃないかということが見てとれると思います。
- ・次のページをご覧ください。
- ・一方、先ほどちょっと触れました通信制夜間定時制のニーズでございしますが、まず通信制につきましては、先ほどもご説明しましたが、平成 28 年度から令和 5 年度を比べまして、だいたい 2 倍以上という形になってございます。
- ・一方、夜間定時制でございしますが、昔は勤労青少年の通われる学校というような役割もございましたが、令和 5 年度のほうをご覧くださいますと、勤労青少年の部分については 4.5%になっておりまして、54.3%がいわゆる不登校であったり、外国ルーツの生徒であったり、様々な生徒たちのセーフティーネットの役割を果たしているという現状があることになります。
- ・次のページをご覧ください。
- ・子どもたちの変化について示しております。
- ・左から不登校の長期欠席者、不登校の数、それから日本語指導が必要な人の数、右側が障がい等により配慮を要する生徒の数でございしますが、いずれも右肩上がりになっておりまして、先ほど申し上げた普通科高校の改革とあわせて、セーフティーネットの重要性ということも、府立高校には求められているのではないかと考えてございます。
- ・次のページをご覧ください。
- ・これから子どもたちが担う未来の社会の姿を書かせていただいております。
- ・真ん中より少し下ですけれども、ご案内の通り、少子高齢化の進行であったり、それから技術革新、グローバル化の進展であったり、それから ICT 等の活用によりまして職業の変化が生まれてきて、一番下のところですけども半数の仕事が自動化されるというふうに言われておりますので、社会の構造自体が変わってきているというようなことが言えるかと思います。
- ・次のページをご覧ください。これまでのまとめでございまして。
- ・今までのご説明の中で、主な視点として、普通科を中心に自ら未来を切り拓く力を育てる教育というのを、さらに進めていく必要があるということと、セーフティーネット系の学校を中心に子どもたちの多様なニーズに応える柔軟な教育を担っていく必要があると書かせていただいております。
- ・下の表は、現在・未来・主体・外的要因でまとめている表でございまして。
- ・以上の状況を踏まえまして、このような中での府立高校改革についてご説明をしたいと思っております。
- ・次のページをご覧ください。
- ・10 ページでございまして。
- ・3 つの改革ということで、我々としては進めていきたいと思っております。

- ・「学校改革」、「入試改革」、「広報改革」、この3つの視点で、府立高校改革を進めていきたいと思っております。
- ・具体的にこれからご説明をしていきたいと思います。
- ・次のページをご覧ください。
- ・まず一つ目、学校改革でございます。府立高校改革の方向性・理念としましては、教育振興基本計画にも書かせていただいておりますように、「卓越性・公平性・多様性」の実現、それから、特色化・魅力化でございます。
- ・あわせて、いろんなタイプの学校をつくっておりますが、その中で、わかりやすさというのを示していく必要があるんじゃないかと、我々としては考えてございます。
- ・次のページをご覧ください。
- ・先ほど申し上げました、どういう改革をしていくかということですが、二つ考えてございます。
- ・一つは、自ら未来を切り拓く力を育てる教育ということで、新しいタイプの普通科を考えていこうと思っております。
- ・この新しいタイプの普通科というのは何かといいますと、大学入試も、総合型選抜を中心に、自ら考えて発言する力みたいなものが必要になってくる時代となっておりますので、特にこの新しいタイプの普通科、現在2校をモデル的に選定しようと考えておりますが、そこについては、探究の時間を充実させて、大学の総合型選抜に対応していくような学校をつくっていききたいと思っております。
- ・あわせて、選抜制度改革をする中で、各校の特色をもっと明確にしていくということを思っております。
- ・もう一つの柱として、多様なニーズに応える柔軟な教育の提供というのを挙げさせていただいております。
- ・こちらの方は、一番下にございますが、いわゆる不登校特例校、こういった設置などを含めまして、柔軟な学びを提供していきたいと考えてございます。
- ・次のページをご覧ください。
- ・先ほど申し上げた入試改革の具体的なものを一つ入れさせていただいてございます。
- ・これは、学校教育審議会の答申をいただいた内容を、今回は紹介させていただいております。
- ・答申内容として、各高校の特色や魅力を発揮できる選抜制度を検討すべきということで、その一つとして、左下のポツの二つ目でございますが、アドミッションポリシーに合致する生徒をアドミッションポリシー選抜枠として、優先的に合格する制度の導入を検討する。ということの答申をいただいております。
- ・特に右側に、3つのスクールポリシーというのを書かさせていただいておりますが、入学時・在学時・卒業時の3つのポリシーがあるんですけども、特に卒業後を見据えて、どのような資質・能力を育成するのかというグラデュエーションポリシーを中心に、どういう特色を出して、どういう生徒に選んでいただくかを示していく入試ということで、我々としては捉えてございます。
- ・次のページをご覧ください。
- ・具体的に、先行自治体でやっている制度について、ご説明をさせていただきます。
- ・静岡県といいますのは、この審議会の中でも、後で出てきますが、袋井商業高校の校長先生にプレゼンをいただきましたこともありまして、静岡県の例を入れさせていただいております。

- ・左側が静岡県の場合ですけれども、100%と書いてあるところまでが、合格者ということになりますが、その中で、学校裁量枠ということが最大 50%まで選べることになってございます。
 - ・この学校裁量枠というのは何かというのが、下に書いてございますが、いわゆる中学校における学習であったりとか、探究活動であったりとか、地域貢献であったりとか、そういった各学校の魅力とか特色を出して、そういったものを選抜資料として、学力検査だけではなくて、調査書・面接・プレゼン等々で、図っていくというような取組をされているということです。
 - ・右側は、大阪府の現行制度でございます。
 - ・大阪府もアドミッションポリシーを少し採用しておるんですけれども、大阪府の場合は先にとるということではなくて、ボーダーゾーンの前 10%につまして、アドミッションポリシーに近い生徒を優先的にとるという取組を現在おこなっております。
 - ・次のページをご覧ください。
 - ・先ほど申し上げました袋井商業高校の取組を具体的に書かせていただいております。
 - ・選抜内容で学科への適性としまして、商業高校ですので、袋商ショップという学校内に会社的なものを設立しまして、地元の特産物を売ったりというようなイベントをされておられます。
 - ・その中で社長や副社長になるものについて、生徒から選ぶのではなくて、特色入試の中で社長・副社長を選ぶというような取り組みをされてございます。
 - ・選抜事業については、調査書・学力検査に加えまして、面接・作文を課しております、その実績としては、だいたい志願者数が 3 名という時もありますが、合格者数が 3 名から 6 名、8 名ということで、役員をこの中で選んでいくというようなことをしております。
 - ・次のページをご覧ください。
 - ・次に、広報改革についてでございます。
 - ・広報改革については、やはり府立高校自体が、広報が弱いというところもありますので、我々としても今後、力を入れていきたいと思っております。
 - ・特に、水野教育長がご就任いただいてから、教育長の学校訪問によりまして、民間の視点で、助言をいただいたりとか、教育庁のホームページも刷新をさせていただきたいということをしております。
 - ・ここについては、やはりの高校からの発信も重要でございますので、学校ホームページの魅力化、SNS なんかを活用して取組を進めているというところでございます。
 - ・下に参考で、子どもたちの高校選びのイメージを書かせていただいておりますが、やはり学校の楽しさ、進路希望の実現みたいなものをやはり求めている保護者・生徒が多いですので、そういったものをいかに発信していくかということが大事なんじゃないかなと思っております。
 - ・我々として、そういった観点も含めまして、動画を作っておりますので、ここで少し動画をご覧いただければと思います。
- (動画視聴)
- ・ご覧いただきました通り、1 人 1 台端末であったり、電子黒板、それから英語アプリを活用した事業、それから探究であったり、そういった府立高校のあまり知られていないと思われるような環境整備もご説明をさせていただいて魅力を発信しているというところでございます。
 - ・次のページをご覧くださいと思います。

- ・最後にスケジュールですけれども、私どもとしましては、ちょうど真ん中あたり入試改革のところに書いてございますが、令和 10 年度の入学者選抜で、新たな選抜制度を考えていきたいと思っております、これは小学校 6 年生、次の中学校に入学する方が、中学校の生活の中でどのような入試でやっていくのかということを知っていただいて過ごしていただくということで、3 年後の令和 10 年度からの入試改革に向けて、今作業を進めているところでございます。
- ・その中で、この 6 年度末に、今申し上げた 3 つの観点について、どういう方向性でやっていくのかということを取りまとめて、お示しをした上で、作業を進めていきたいと考えてございます。
- ・次のページをご覧ください。
- ・本日の意見交換でございますが、19 ページになります。次のページになります。
- ・先ほど申し上げました 3 つの観点について幅広く、ご意見をお願いさせていただきまして、今回の総合教育会議を踏まえまして、先ほど申し上げた 3 月末のパッケージ、府立高校改革案の取りまとめにつなげてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。
- ・私からの説明は以上でございます。

(司会・野村企画室長)

- ・それでは、ただいまの内容について意見交換に入らせていただきます。
- ・まず、本日ご欠席の井上委員から、ご意見をお預かりしておりますのでご紹介をお願いします。

(教育庁)

- ・それでは、教育総務企画課より井上委員のご意見をご紹介します。
- ・学校改革について、通信制や夜間定時制の充実を図る必要がある。
- ・昼間の学校で、集団での学びには馴染めないが、高い能力を持った生徒も多くいる。
- ・特定の分野に突出した能力を持つような生徒もあり、得意な分野を伸ばすことに力点を置くべきではないかと考える。
- ・例えば、プログラミングが非常に得意だが、コミュニケーションが苦手な生徒は、プログラミングの能力を高め、大学進学や開発者として就職する道をサポートすると、社会で大きく活躍ができる生徒も多くいると思う。
- ・基礎的な学力を習得することは必須だが、好きなことや得意なことを伸ばしてあげられるよう通信制と夜間定時制のカリキュラムの充実を図ってほしい。
- ・入試改革について、私は教育委員として、平成 28 年度入学者選抜において導入された現行制度の検討に関わった。
- ・当時の教育委員長、教育庁、事務局の方々と、他都道府県の高校入試や日米の大学の入試についても研究した。
- ・当時も静岡県为学校裁量枠のように、アドミッションポリシーに合致した志願者を優先的に合格させる選抜方法を検討したが、導入は時期尚早と判断した。
- ・その理由は、ハーバード大学を初めとする米国の大学は、いわゆる A O 入試で全ての学生を選抜しており、日本では 1990 年に慶應義塾大学総合政策学部と環境情報学部で A O 入試が開始されていた。

- ・アドミッションポリシーの合致した制度を優先的に合格させるには、選抜する側に十分なノウハウが獲得されていることが前提となる。
- ・選抜側、つまり教員がアドミッションポリシーに合致しているかどうかについて、適切な判断ができない場合には、不公平な試験制度になることから、まずは90%から110%のボーダーゾーンにいる志願者について、アドミッションポリシーに極めて合致する志願者を優先的に合格させる制度とした。
- ・その背景には、このボーダーゾーンの生徒がアドミッションポリシーに合致しているかを見極め、教員が知見を獲得することを狙っていた。
- ・制度導入後9年が経過し、学校側に知見が獲得されてきたと考えられることから、次の改革において、アドミッションポリシー選抜枠の導入を検討することに賛成である。
- ・定員の100%をその枠で取る学校があってもよいと考える。
- ・さらに、今回の入試改革においては、5教科の均等配点ではなく、求める生徒像に合わせて、傾斜配点や試験科目の削減、つまりは2教科や1教科での合否判定があっても良いと思う。
- ・それにより、何かに秀でた生徒が合格し、生徒が成長し、学校の特色化が進むと考える。
- ・加えて、大阪府立の中高一貫校の更なる設置に関しても、研究すべき価値があると思う。
- ・東京都や北関東の県等で設置され、リーダー育成等で大きな成果を出している。
- ・私立高校の多くは中高一貫で運営され、探究学習で成果を出している学校も多い。
- ・大阪の講師の切磋琢磨の観点からも検討すべきだと考える。
- ・井上委員からの意見は以上でございます。

(司会・野村企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・それでは、まず教育委員の皆様で、ご意見ご質問等はございますでしょうか。
- ・どなたからでも結構でございます。
- ・中井委員いかがでしょうか。

(中井教育委員)

- ・質問的なことが一つだけあるんですが、先ほど袋井商業高校の入試例を説明していただきました。
- ・学校裁量枠が50%、すごい枠かなと思うんですけど、井上委員が今言われたように、僕もアドミッションポリシーの枠を広げることは、実は大賛成です。
- ・でも教育委員会の事務局の方々は、どれぐらいの実績を目指しているのか。これを良しとして目指していこうとされているのかどうか、少しだけ気になります。
- ・私としては、50%は取りすぎかと思うんですけど、最後の10%のところが、実は今現状では、中学校の教員というよりも、塾がアドミッションポリシーに沿った作文を指導しているんですよ。はっきり言うたら。
- ・その作文を見て、通してもあまり意味がないじゃないですか。
- ・もうちょっと枠を広げて、例えばそこで面接を入れるとか、ちょっと違う角度で切り込んでいかないと、本当のアドミッションポリシーにならないと思うんです。

- ・そこを本当にアドミッションポリシーに合致する生徒を選ぶことはとても大事だと思うので、これは増やしていきたいと思いますが、何かお答えできる範囲がもしあるのであれば、ただ単に例示なのか、例えばこんなことを目指しているよというようなことであるのか、ちょっとだけお答えいただけたら助かります。

(教育庁)

- ・ありがとうございます。14 ページのところに静岡県と大阪府の例の図があるんですけども、今、中井委員にご指摘いただいた通り、大阪府では、いわゆるボーダーゾーンのところをアドミッションポリシーでやっていますが、定員割れの問題とかがありまして、ここが使っていない学校もあります。
- ・平成 28 年度の制度導入当時は、かなり率が高かったんですけども、年々ちょっと下がってきている。
- ・その一方で、全ての生徒に対して自己申告書を求めているというような課題もございまして、我々としても、そのボーダーゾーンではなくて、必要であれば先にそういった特色を出していくことは必要なのかなと思っておりまして、何%にするかについては、今ちょっと議論をしている途中ですので、そこまでまだ決定したものではございません。

(中井教育委員)

- ・ありがとうございます。
- ・私も今、ご意見聞いて心を強くしたところでございますが、もう一つだけちょっと申し上げたいことがあります。今のボーダーゾーンの話させていただきまされたけど、中学校から高校へ行く時の指導は、今主体が残念ながら塾が行っている。塾がしているということは、子どもが本当に行きたい学校を選んでいるかどうか甚だ疑問です。
- ・偏差値ですが、きみはここの高校、きみはここの高校、という形で決まります。そこで落ちたときは、自分の行きたい私学へ行く。何かそんな流れができていないのかなと。
- ・だから、各学校が特色を一生懸命出すのはもちろん大賛成なんですけど、それが本当に生徒の魅力につながっているのかどうか。
- ・このあたりを十分検証していただきまして、本当に生徒が公立高校を選んで行きたい、そういうふうな流れに、今後公立高校を持っていただくと、もっともっと公立にも回帰してくるだろうと思いますし、公立高校も活性化すると思います。
- ・そのためには、例えば教育課程なんかも柔軟に、学校が教育したい内容、必要履修科目が何単位か、これ 2 倍 3 倍駄目ですよ、ではなくて、極端なこと言うたら数 I を、この学校は 9 単位をかけてでも、10 単位をかけてでも、徹底的にやみたいなのでも構いません。例えば、の話ですが。
- ・いろんな教科科目の中で、生徒のニーズをうまく捕まえて、生徒が行きたいというふうな、そういうカリキュラムを作っていないと、学校はこんな特色だと言っても、それに本当に生徒が答えてくれているかどうか、今ちょっと私は疑問なので、そこが合致するような方向性で、高校改革を進めていただくと、今度もっと良くなるような気がいたします。以上です。

(教育庁)

- ・ありがとうございます。

- ・現時点で、今申し上げた静岡県のやり方をそのままやるということでは、まだなく、検討中ですが、我々としては 13 ページにございます 3 つのスクールポリシーというのがありますけども、そういったものに合致するような、入試を各学校に考えていただいて、それで生徒に選んでいただくというようなことを主眼に、どういう入試制度がいいかということの検討を進めていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします

(司会・野村企画室長)

- ・他にご意見、ご質問等ございますでしょうか。
- ・森口委員お願いします。

(森口教育委員)

- ・ご説明いただきましてありがとうございました。
- ・ここ数年間、私学への進学者が増えて、公立の志願者が減ってきているのは、もう数で明らかでした。
- ・なので今こそ、府立高校改革が必要ではないのかなというふうに感じています。
- ・今、説明の中にありましたように、府立高校が支えるのは多様な学びですし、もちろんこの通信制高校や夜間の高校のように、セーフティーネットとしての役割もすごくあると思います。
- ・こういったセーフティーネットを守るということは、地域との連携を求めて、府が全体としてどのように配置するか、理想的な学びを進めていけるというのは、府立高校だからこそできることで、残念ながら私立の中には、そういう観念を持ち入れるのはちょっと難しいところだと思います。
- ・この間、進めてきた教育改革の中身を、しっかり振り返って検証した上で、今後の改革を進めていただきたいなと思います。
- ・特に資料の中でありましたように、大学進学希望は多いけれども、その大学卒業後に社会へ適応できているのかというのを、非常に心配しております。
- ・高校卒業後の 5 年後、いわゆる 4 年制大学を卒業した後に生徒たちがどうなっているのか。
- ・トップ校の生徒たちの育成というのは、ある程度分析されているのは聞いておりますけれども、実際のところ、普通科に進まれた方たちが、社会に出て、どのような道に進んでいるのか。
- ・それをもって、私達の教育改革が正しい方向というか、より良い方向に向かうよう分析をしていく必要があるのではないかなと思います。
- ・令和 5 年度の通信制高校から大学への進学者が、わずか 26.5%と、府内の高校全体の 67.6%に比べるとかなり低くなっておりまして、アドミッションポリシー、様々おっしゃってられますが、もちろん通信制とか、こういったエンパワメントスクールにおいては、グラデュエーションポリシーが明確になって、生徒が卒業後に社会に出てやっていける力をつけているのかどうかというところが、やっぱり教育の中で一番求められるところではないかなと思っております。
- ・この点について、やはり肝を入れて改革をしていただけたらなと思っております。
- ・また特に広報改革については、先ほどもおっしゃってありました中学生にわかりやすい発信が必要ということで、能力の高い子どもたちは本当に自分の力で、ちょっとしたきっかけで伸びていくと思いますし、私に関わる支援学校や支援学級の方で学ぶ子どもたちについては、現場の教員の方々も、と

てもよく勉強されていて、どういったことをすれば、この子たちを伸ばしていけるのかというのを非常によく勉強されておられます。

- ・ただ一方、学ぶ意欲のない生徒や不登校生が非常に増えているというところは、そこへの働きかけに対して、中学校や小学校の先生方、その子たちが成長していった高校に入ったときに、先生方がどのように対応したらいいのかという戸惑いが見える。
- ・そもそも、アドミッションポリシーをあまり入学の時点で見えていない不登校生の保護者も、ひとまず学校に行ってくれたらそれでいいかなという考えになりがちで、本当にその子に合った学び続けられる学校を選んでいるのかというところも、疑問だと思います。
- ・疑問というよりは、これからの課題だとして取り組んでいただけたらと思います。
- ・私自身外来で、不登校の子どもたちを見ていまして、小学校の前半、それから後半ぐらいから何となく「お腹が痛い」、「頭が痛い」、「ちょっと朝起きれない」と言って学校行かない子どもたちが、その後中学に行っても学校を休みがちになり、中学校・高校と不登校が続くという子どもたちが、多いように見えます。
- ・そういう意味では、小中での支援が非常に重要で、この校内支援ルームが設置されているというのは、非常に大きなことだと思います。
- ・ここに教職員だけでなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、そして外部人材もお話を聞いてもらえることで救われるのではないかなと思っておりますので、これは公立だからこその強みですし、頑張って外部人材をしっかり確保して支援ルームの充実に努めてもらえたらと思っております。
- ・加えて、それが公立のエンパワメントスクールや高等支援学校や、また共生高校、そういったことの後押しに非常に有効な場面も、私はたくさん見ておりますので、中高連携を深めるという工夫も不登校への対応には非常に重要だと思っております。
- ・あと高校改革について、少し資料を頂戴しましたので、今回のテーマとはちょっと離れはいたしますけれども、府立高校再編整備も含めながら、今回の改革を進めていくことになるだろうと思います。
- ・再編については、やはり大阪府内全域を見つめた地政学的に府立・市立をどう点在させるかというのも、府の大きなお仕事だと思いますので、こういった改革の中でも、そこも重点を置いて検討していただけたらと思っております。私からの意見は以上です。

(司会・野村企画室長)

- ・他にございますでしょうか。
- ・竹内委員、お願いします。

(竹内教育委員)

- ・ご説明ありがとうございました。
- ・今回、関わったいろいろな方々のご努力によって良い方針が出ていると、方向性的にすごくいいなというふうに感じますので、ぜひ、これを実施に移していただきたいと思います。理念的にはすごくいいのですが、実際、実施に移そうとしたときに、かなりいろいろな問題が出てくるという視点から意見を述べさせていただきたいなと思っております。

- ・まず1番目の学校改革についてなんですけれども、探究学習であるとか、配慮の必要な生徒さんへの支援とか、通信制の学びとか、こういうものを実行に移していくためには、今おられる先生方の教員の研修というものが非常に重要になってくるなというふうに思っています。
- ・先生方は各教科の専門家として教育を受けられ、また多様性というよりも一般性を重んじて授業する方向性で、今まで育ってこられた方が多いと思います。
- ・この中で多様性が大切であるとか、教科を超えた学びであるとかいうようなことを持ち出すと、先生方がかなり困られるというか、新たに学ばなければいけない状況にしばらく陥ると思います。
- ・このとき、いかに教育庁の方から支援をしていただけるかということが、大きな成否の別れ目になっていくのではないかなと思っています。
- ・多分、1回限りの研修で身につくようなことではないと思いますので、できる限り継続的に研修を取り入れていただければありがたいなと思っています。
- ・それから学校改革をするときに、難しいと思いますが、クラスサイズの問題に踏み込まないと、なかなか多様性を重んじた教育というのは難しいと思います。
- ・例えばエンパワメントスクールとか、ああいうところの生徒数を考えたときに、普通科の学校で40人とかいうような大きな規模でやっていくというのは、かなり難しいだろうと思いますので、困難を承知の上で申し上げますけれども、クラスサイズの問題には柔軟に対応を考えていく必要があるかなと思っています。
- ・入試改革については、もう大学では2月の入試が中心ではなくなってきました。
- ・もうほとんど10月から12月あたりに行われている総合型選抜や学校推薦型の推薦の方にシフトしています。ということは、高等学校でこういうようなことをするというのは全く理にかなっているというか、流れとしては正しいのだろうなと思うんですが、大学も10月から12月にかけて講義をしながら入試をするという、しかも普通の入試ではないので、大量にいろんな情報を取り入れて選抜を行うという入試をしておりますので、かなりの負担がかかってきております。
- ・これを高等学校でやるとしたときに、いつの時期に行うかというのは、ものすごく重要で、例えば2月とかに行ったら、授業をやりながら片手間にやれるようなものではないので、相当に大きな負担になり、生徒さんと向き合う、在校生の皆さんと向き合う時間が削られてしまうのではないかなということで、この辺りのご支援をしっかりとお願いしたいと思っています。
- ・また、日本の高等学校のアドミッションポリシーというのは、非常に曖昧なものが多いです。
- ・私学だと創立者がいますので、あるいは創立の理念がありますので、明確になってきますが、公立の場合には、そういうのがあまりはっきりしていないので、アドミッションポリシー中心で入試選抜を行うと、そっちがはっきりしていないと選ばれる人もはっきりしてこないで、このポイントは、教育庁の方から少し学校に対する干渉になるかもしれませんが、ある程度指針を示されて、どうしているのかを考えてほしいかというのを事前に提示しておいた方がいいのかなと思っています。
- ・ここで、ユニークな能力を持った人を選べたら、相当に目標は達成できるんでしょうけども、では入った後、今度はカリキュラムポリシーとして、そのユニークな能力を持った人たちをどう支援していくのかということも合わせて考えていかなければいけませんので、アドミッションポリシーとカリキュラムポリシーの整合性というのは、ものすごく重要で、これについておろそかにはできないなと考えておりますので、ぜひ指針の提示をお願いしたいと考えています。

- ・最後に広報改革ですけれども、大学は広報に、どれほどお金をかけて、どれほど人をかけているかを考えたときに、片手間で先生方とか事務の職員さんたちが、広報をして特色を示していくのにはやっぱり限界があると思います。
- ・そこで、経験やノウハウをできるだけ蓄積して、教育庁の方からのご支援をいただきたいということと、進学フェアみたいなもの、この前私も行かせていただきましたけれど、非常に充実しておりましたので、ああいうものをしっかりとやっていく。
- ・あるいは、場合によっては、広報の専門スタッフを配属するというようなことまで考えていかないと、特色を出し、それで入試をしていくということが難しくなると思いますので、そのあたりにもご配慮いただければなと思っております。
- ・教育の改革は理念が素晴らしくても、実際それを実施に移したときに、うまくいかなければ、絵に描いた餅になりますので、そのあたりのご支援をよろしくお願ひしたいというのが私の意見になります。よろしくお願ひいたします。

(司会・野村企画室長)

- ・ありがとうございます。
- ・尾崎委員はいかがでしょう。

(尾崎教育委員)

- ・私の方からは、いろんな自治体で小中学校の授業づくりや学校づくりをやっているという観点から、またちょっとお話をさせていただきたいと思います。
- ・まず大きいところでいくと、いつも思うのですが、未来を切り開くとか、生き残る、生き抜く、大変な時代だから、これを見た子どもたちは、未来に対して何もわくわくしないんですね。
- ・歯を食いしばって、壁を登るために頑張らねばという、何かそこばかりを伝えてしまうと、子どもたちは、やっぱりわくわくしてこそ学びになるので、何か大阪っぽい面白がるとか、楽しむとか、幸せになるためにみんな生きているので、何かそういうような要素をやっぱり全体の中に少しでも入れておいてもらいたいなと思っています。
- ・面白がるって、どういうことかという、やっぱり体験して、多角的に見て、自分が仮説を立てて、何かそれと違ったとか、そういうのが多分すごく面白く見えるポイントだと思います。
- ・今、吉村知事も球根を育てられていると思いますが、球根が玉ねぎみたいだとか、主従関係が違うとか、マニュアルと違うとか、体験して、疑問が湧いて、あれ、学んだことと実際って、どうつながっているのだろうというのが、つながりさえすれば、目の前にどんなものを持ってこられても面白がる子になる。そうなったら、いろんな変化があっても、何が、どんな壁があっても、どうやって登ってみようかなと思える子が育っていくと思うので、そういうような面白がる、楽しむっていう要素は、これからの時代にとっても必要だと思っています。
- ・それをするために、いろんな体験で、いろんな価値観の人と会うべきこの小中学校の時代に、やはり高校入試が点数で判断される以上、よく中学校の先生がおっしゃるんですけど、キャリア教育も総合学習も探究学習も大切だ、でも、1点でもあげないと、行きたい高校に行けないのだったら、その時間よりも点数を上げる時間に、やっぱり割いてほしいというような保護者の声もあります。

- ・そういう中で、やっぱりやったことないことは好きか嫌いかも判断できないし、食べたことないものを好きか嫌いかわからない中で、ほとんど体験していないのに、「はい、どこの高校行きますか」、「あなたの進路は何ですか」と言われても、なかなか子どもたちで決められなくて、なので私が行くキャリア教育の授業で一番多い質問は、「夢がありません。僕は駄目でしょうか」という、なんか「あなたが知っている狭い世界の狭い情報の中から選ぶことの方が、すごい大きな可能性を捨てちゃうことやから、そんなに決められないことにマイナスにならなくてもいいよ」と言ったとしても、やっぱり今の入試の状態であると、何か自分が目標を持って行きたいところ、今の情報だけで決めなければならないというのは、すごく苦しいことだなと思うので、点数以外の見え方、そして自分自身が今、何者かがわかっていない状態でも、チャレンジできるっていうような、何かそういう入試改革ができると子どもたちの自己肯定感を、中学校の時に下げずに、いろんな体験と自分の熱中することに、ある程度時間を割けるのではないかなと思っています。
- ・そうやって入った子どもたちが学校の中で、また同じように、詰め込み学習で何も自己決定できない、何も体験できないとなると、さらに大学も、その先の就職も同じように決定できなくなってしまうので、高校ではもっといろんなことができるようになっていっているので、探究学習以外の時間も全て、学校丸々含めていろんな人に出会って、いろんな社会に出ていくような機会をつくってほしいなと思っています。
- ・広報改革にもつながりますけれども、やっぱり学校の中で子どもたちを閉じ込めすぎるのは良くないなと思っています。
- ・高校生の力なんて、自治体とか行政とか、自治会の人たちから見ると、欲しくてたまらない力ですよ。
- ・お祭りにしても、何にしても高校生に参加してほしい、でも、なかなか勉強が忙しくて参加してもらえない。
- ・それだったら、もっともっと地域に子どもたちの力を貸してもらおうというか、子どもたちをもっと使った方が、子どもたち自身も生きた学びになるし、地域の特色にもなるし、地域も喜ぶ。
- ・喜んでもらえたら嬉しくて、さらに何かやりたくなるという、この好循環が、学校の中の限られた価値観の中だけだと、なかなか育みにくいので、どんどん外に出るような授業をやってほしいなと思いますし、生徒自体がメディアだと思います。
- ・学校の中で決められたルートで大学に行きました、活躍しただけではなくて、学校の外に自ら行って企画しました、自治体のボランティアに参加しました、自分が得意なレストランを、キッチンを出してやっていますとか、そういうような様子を見ることで、あんなふうになれるって思って、希望する子たちも多いと思うので、子どもたち自身の個性とか違いを学校改革にも、広報改革にも生かしていくというのが、これからの府立高校改革に期待することです。以上です。

(司会・野村企画室長)

- ・ありがとうございます。
- ・そうしましたら、教育長いかがでしょうか。

(教育長)

- ・皆様の意見を大変わくわくしながら聞かせていただきました。ありがとうございます。

- ・日々、事務局の長をしていると、どうしても目先の課題をどう潰していくかというところですが、やはり未来のことを想像しながら、そしてバックキャストしていくというのは、大変大事な仕事の仕方だなというふうに、改めて認識をいたしました。
- ・まさにバックキャストで考えていくと、そもそも今の子どもたちが生きる未来って、すごい未来ですよ。
- ・もう来年、いよいよ大阪・関西万博ありますが、そのパビリオンの情報を見ている、こんな未来に子どもは生きるんやと。
- ・その未来で、ウェルビーイング、高く、わくわくしながら生きていく子たちを育てようと思ったら、果たしてこの授業でいいのかなとか、こういう入試制度でいいのかなとか、徐々に目先の課題に下りてきているというのが、私のこの10ヶ月の実感です。
- ・やはり当たり前というものもずいぶん変わってきておりまして、以前だったら英語教育が大事だし、グローバル人材を育てていくといったら、やはり英語のコミュニケーションというのも重要である。
- ・でも、ドラえものの「ほんやくコンニャク」みたいなのが当たり前のような未来が、もうすぐそこに来ている中で、果たして今の英語教育のあり方はこれでいいのか。
- ・はたまた先ほどもBASE in OSAKA というものがプロモーションビデオで流れましたけれども、あれを使えば、何というかネイティブの発音、自分で喋って判断診断もしてくれる、点数も付けてくれる。
- ・これをもっと授業で活用したらみたいな、こういうイメージにつながっていくのかなというふうに感じます。
- ・そして改革に関しましては、3つ、事務局の方で出しておりますけれども、特に今回私が述べたいのは広報の改革です。ここはやはり、公教育が苦手な分野だなと感じております。
- ・黙っていても生徒が集まる時代でもなくなってきていますし、何より保護者とか地域の皆様にも、その学校が目指す教育というのを共有しながら、学校経営・学校運営をしていく時代だと思っています。
- ・この公教育に対して、情報発信も大事ですが、いわゆる教育投資を呼び込んでいくような仕掛けも併せて考えていかないといけないなと感じています。
- ・そのような状況においては、当然のことながらですが、マーケティングとブランディング、それに伴うプロモーション、ここはマストだと思っております。
- ・既に、この夏から府教育庁としましても、臨時の校長研修であるとか、生徒対象のSNS研修を行って、徐々にではありますが、プロモーション活動が動き始めております。
- ・今後、府立高校におけるプロモーションの経験の集積と、先ほど竹内教育委員もおっしゃっていただきましたが、なかなか手弁当でやる広報というのは、手数が増えても、その広報の内容やクオリティが低かったらあかん候補になっちゃうわけです。
- ・この程度の動画しか作れないところなのか、みたいなね、子どもたちは、今すごい目が肥えていますので。
- ・そう考えていくと、民間手法の研究であるとか、専門人材の活用、配置というのもイメージしながら、子どもたちを何よりわくわくさせていくような広報を進めていきたいなと感じております。以上です。

(司会・野村企画室長)

- ・ありがとうございます。

- ・他にご意見、ご質問等ございますでしょうか。
- ・知事、ご質問等はありますか。

(知事)

- ・まず学校改革に関して、これからの教育で非常に重要になってくるのは、ずっと言っていることでもあります。英語なんじゃないかなと思っています。
- ・英語によるコミュニケーション、それは受験の英語力をどんどん高めてください、という趣旨ではなく、おそらく社会は、これからもっともっと、海外と交わるように日本もなってきます。もう既になりつつありますし、これから、よりそうなってくると僕は思っています。
- ・例えば道で海外の人に、旅行者に道を聞かれて、もう全くその対応もできない人が、世の中にあまりにも多すぎる。でも、よく考えたら、それは本当にちょっとおかしい状況にもなっているんじゃないかなと思います。
- ・英語である程度コミュニケーションしたり、あるいはそこに何かアレルギーがないというか、海外と常に接している感覚であったり、そのオープンマインドであったり、何かそういった英語に関する教育というのを、僕はもっと力を入れなきゃいけないのではないかなと思っています。
- ・世界との関係という意味で、これからもっとそれが近づくと思います。
- ・少子化になるし、人材でも海外の人が、日本に入ってくることもやっぱり増えてくる。そういったときに、最低限のコミュニケーションスキルというか、コミュニケーションマインドというか、そういったものも教育において非常に重要ではないか、特に高校生の教育においては、というふうに思っています。
- ・そういった観点から、タブレットを導入する中で、さっき教育長からもありましたが、ネイティブのいろいろ取組しているのは、ぜひまたしっかりと進めてもらいたいと思いますし、タブレットを使った教育で、いろんな取組であったり、あるいはネイティブの外国人の講師を高校に増やすというのは、僕は予算付けをして、やったところでもあります。
- ・そこをもっともっと何か広められないかなと思います。
- ・海外の姉妹校というのは、どのぐらいあるのですかね、公立高校でいうと。

(教育庁)

- ・ちょっと数値、具体的な数値は持っていませんけれども、例えば英語とか、国際という理解で教育を重視している学校においては、ほぼ全校でその姉妹校という提携を持ちながら、関係作りをやっております。

(知事)

- ・その英語とか、非常に国際感覚に優れた外国運用能力を身につけることができる学校 13 校は、22 ページにありますが、こういった学校はやっているのだらうとは思いますが。
- ・グローバルリーダーズハイスクールでもやっているところあるのかもしれないですけども、この辺りどうですか。
- ・あとは普通校ですね、結局。

- ・今回 96 校の普通校の改革という中で、例えば普通校でも、もう海外姉妹校が 1 校あるのは当たり前だと。1 府立高校 1 海外姉妹校みたいなことぐらい、僕はやるべきじゃないのかなと。
- ・タブレットがあるから、その相手国、相手の学校もタブレット環境は必要ですけども、タブレットで何かお喋りするだとか、そこで自分たちの英語能力にも気づくこともあると思うし、海外の人ってこんなこと考えているんだ、海外の同じ学年の高校生ってこんなこと考えているんだとか、そういったことに触れることもできると思います。
- ・その触れる場所があまりにもない。日本人ばかりだから。でも島国の中で、おそらく、これからその海外との関係という力を高めていく必要も、必然的に好き嫌いに関わらずやってくると思いますし、そこにもうちちょっと目を向けた方が子どもたちにとってプラスになるのではないかと思います。
- ・大学受験も結構英語を重視するところが増えてきていますよね。例えば英検何級で何点とか。大学もおそらくそういった人材を求めているというか、そうしていかなきゃいけないって変わってきているのかなっていうふうに感じています。昔と比べたら。今後その流れはより強くなると思います。
- ・そうすると、やはり高校において、1 公立高校 1 海外姉妹校ぐらいの関係をどこかと結ぶ努力をして、タブレットでつながっているから、たまにはそのタブレットをつなげてやり取りをする。
- ・向こうは日本語が喋れないから、結構大変かもしれないけれども、そこは英語の先生もいるから、日本の英語の先生の刺激にもなるのではないかなと思います。
- ・なので、そういった実践的な学び、これから翻訳する機会は増えてくると思いますが、やっぱりそれだけではないと思うんです、英語の学びっていうか、海外の人がどんなことを考えているのかなとか。やっぱり、そういったことが必要になってくると思います。
- ・そういう意味では国際的な感覚というか、大阪の人は結構オープンマインドなので、向いているんじゃないかなと思いますし、ここはおそらく大事だと思います。
- ・生涯の稼ぐ力って言い方悪いですけど、生きていく力というかをつけるためにも、多分英語でコミュニケーションができる、あるいはそれに恐れない。伸ばしたい人はどんどん伸ばしていけばいいし、街で海外の人と会ったら、自分から話しかけようかぐらいのそんなマインドというか、レベル感じゃなくてマインドですよ、特に。
- ・学校改革の中身に、英語というのは、ぜひ強化し、取り入れてもらいたいなっていうのはずいぶん前から言っているんですけど、今回も学校改革する上で、やってもらいたい。
- ・もちろんその学校によっては、偏差値があって、なかなかそんなことできないと言うかもしれないけど、別に高いレベルをみんなに求めているわけではなくて、もちろん一生懸命、勉強が大好きで、向こうの学生と普通に喋るぐらいの子どもたちがいるような学校もそれはあるだろうし、あまり勉強は得意じゃないよという公立高校もある中で、なんかそれはちょっと学校の先生も介在しながら、そのレベルに会って触れる、接触する、そしてコミュニケーションを取ろうとする。
- ・そういう姿勢みたいなのは、おそらく社会に出たときに重要になってくると思うし、その人にとって絶対プラスになると思います。
- ・発展すれば、交換留学のような制度なんかもやったら、好きな子は交換留学に向こうに行って、今度は向こうの姉妹校からこっちに来て。

- ・滞在する家は自分のところの学生だから、そこまで滞在費もかからないというようなやり方で、学校に行くと、何人かの留学生が常にいるみたいな、そういう環境を作る。英語力というか、国際力というか、そういうものを府立高校でもやっていくべきじゃないかなと。
- ・ツールもあるので、1 府立高校 1 海外姉妹校というのを、今ちょっと考えているんですけど、何の打ち合わせもしてないですけど、どうですかね。
- ・市町村とか大阪府もそうだけど、姉妹都市というのがあるし、学校の英語の先生によっては、その先生の関係で海外のなんか学校と知り合いというのはあるだろうし。
- ・コネクションのやり方はいくつかあって、それはやりやすいところでやればいいと思いますが、そのあたり検討とかされていますか。

(教育庁)

- ・先ほど課長から申し上げた通り、国際関係学科、グローバルリーダーズハイスクール等々は、基本的には姉妹校を結んでおりますが、普通科高校総合学科でも、かなりの学校が結んでおります。実態的には結んでおります。
- ・あと併せて、知事もおっしゃっていただいております英語力ということで、NET (Native English Teacher) を全ての学校に導入をいただきまして、併せてオールイングリッシュでの授業というのも進めているところです。
- ・姉妹校につきましては、今タブレットが、知事おっしゃっていただいたようにありますので、僕がちょっと見に行った学校なんかですと、海外の生徒と一対一で話をしている。
- ・それは1人ずつが違う生徒と、つながって話をしているというような場面も見たことがあります。
- ・ただ、基本的に姉妹校に多いのが、アジアの学校が多いです。
- ・やはり欧米はちょっと時間差がありまして、時差があるので、なかなかオンタイムで話ができないということなので、台湾であったりとか、韓国であったりとか、そういったところと姉妹校を結んで、学校によっては、いわゆるそこに修学旅行に行ったりとか、あるいは今知事がおっしゃっていただいたようなホームステイで、やり取りをしているという学校もあります。
- ・我々としてもそういった中で、国際力、英語力というのは身につけていきたいと思いますので、改革の中でも、そういったことをさらに進めていきたいと思っております。

(知事)

- ・そしたら、一度 96 校全部について、1 府立高校 1 姉妹校になっているのかというのは、ちょっとリストアップしてもらって。とりわけ英語圏ですよ。
- ・英語が、やっぱり教育して話せているところを、僕はぜひやってもらいたいと思うので、母語が英語じゃないとか当然ありますけれども。
- ・今、海外に行ったら、みんな英語は話せますよ、見てみると。日本の英語力は、本当に低いなと正直思います。一定勉強してきた人も含めて、僕も低いんですが。
- ・でも、海外においては、英語でコミュニケーションとるのはもう絶対必要だという、多分信念というか、当たり前の感覚があって、そうなっていると思います。

- ・母語は、もちろんあると思いますが、英語で普段コミュニケーションできている国との1姉妹校みたいなのは、どのくらいあるかちょっとリストアップして、そしてその中身も、どういうことをやっているのか。名前だけ姉妹校じゃなくて、実際に、双方向のタブレットを使ってどういうことをしているのか、いかに英語教育に役立っているのか。
- ・また、交換留学なんかもそうですけども、そこを発展しようとしているのかというのを、詳しく見てもらいたいなと。
- ・教育長が言ったら、こういうことをやっていますとなると思いますし、教育委員会の偉いさんがいくと、やっていますとなるから。
- ・本当に一校一校リストアップして行って、海外の同じ学年の子どもたちとつながるような、生の英語と接して、海外の価値観とか、そういう英語を喋る同学年の人たちとの刺激とか、そういったものを実際に構築する。
- ・そういうのをリストアップしてもらって、制度を考えてもらったら、来年度の予算で僕も考えますので。そこのところは特別に。特に来年万博もありますし。
- ・ある意味、万博をきっかけに、大阪の府立高校は全部1海外姉妹校があつて、実際タブレットで、いろいろ話をしたり、コミュニケーションを取ろうとしてやっているよねと。
- ・学校を卒業したら、道で海外の人と会ったら挨拶して、普通に「こっちですよ」とかいう話ができるとか、その程度のコミュニケーションは取れますよね、ぐらい。
- ・それにビビらないですよ、というような、この教育のあり方というか、そこのところ、万博イヤーということも含めて、ちょっと考えてみたらいいじゃないですかね、真剣に。

(教育長)

- ・子どもたちが、そもそも英語を喋らないといけない環境とか必要性というのが、なかなか見えないところも実はある。
- ・でも、実際今知事おっしゃったみたいに、例えば海外とタブレットでつながる授業を私も公立で見に行ったが、うまく喋れないのですよ、子どもたちも。私が見たのは、フィリピンの子と喋っていたのですが。
- ・ただ、喋れないからこそ、悔しさがあって、さらにこの子のことをもっと知りたいとか、私のことを喋りたいと言うと、勉強するのですよね。
- ・それでタブレットで学習して、次の授業では、おそらくちょっと通じるようになると思います。
- ・こういう機会をもう少し作っていく仕掛けというのが必要であつて、今知事おっしゃったところも、まさにマインドの部分ですよ。すごく大切だと思います。

(知事)

- ・そういうような気づき、現時点の気づきにもなると思います。
- ・もちろん、教科書を見て英文が並んで一生懸命読む勉強なんか、ほぼそれでしたけど、僕の時代の英語教育というのは。
- ・でも、そうやって実際タブレットでつながる社会なので、そこで「何か悔しい、あまりコミュニケーション取れなかった」と思えば、その次につながる。

- ・日本の英語の先生も、やっぱりそこで刺激を受けることがあると思います。
- ・1 府立高校 1 海外姉妹校みたいなものを目標にして、実際のコミュニケーションを取るような仕組みとか、万博もあるから、ちょうど高校生も万博に行ったらいろんな海外の人と接することもできる。
- ・なので、ちょっとここを吉所に、それができないか考えてもらいたい。

(教育長)

- ・子どもたちがそういうふうには英語に、まさにもう触れていく海外の方と、ちょっと臆病になりながらも、「いけた」という経験を作っていくための手法を少し検討して、まずデータも調べます。

(知事)

- ・交換留学なんかも積極的にして、留学費用なんかもあるのであれば、僕も考えます。
- ・実際に学校に、海外の子がいる。それだけでもやっぱり違うと思う。
- ・だから、英語の教育を、ぜひ考えてもらいたいなと。学校改革の中に、一つ入れてもらいたいなと思います。
- ・あと、地域ポテンシャルを生かした特色・魅力化へということで、森口委員もおっしゃっていただきましたが、府全体を見据えたときの、そういった地域とのつながりとか配置みたいなのも、やっぱり考えてもいいのかなというふうにもちょっと思うところもあるので、そこは一つ考えてもらえたらなと思います。
- ・それから、入試改革は答申を受けて、適切に進めてもらえたらと思います。
- ・広報改革は、非常に教育長も力を入れておられるということなので、先ほどの素晴らしい動画もありましたが、ぜひ進めてもらえたらなと思います。
- ・ただ併せて、発信の主体が、生徒自身がメディアになると尾崎委員がおっしゃったのは、本当にそうで、今まさに Y o u T u b e であったり、いろんな発信の仕方があると思います。
- ・なので、その学校の広報発信を生徒さんの生の声を、いろんな Y o u T u b e とか S N S とかで、「こんなことやってます」みたいなのを、もっともっと発信してもいいのではないかと思います。
- ・教育庁が作られたビデオもすごく素晴らしいと思いますけれども、よく広報といったらテレビがやるような、テレビマンの本当にプロの人たちが、素晴らしい物を完成させて、それを僕たちはテレビで見ているから、あれが完成形だという、たしかにプロが集まった空間ではあるのですけれども。
- ・でもその真似をしようとすると、やはりお金もかかるし、能力もなかなか難しい。
- ・多分、そこまで求めてない子もたくさんいて、だからこそ Y o u T u b e なんかも一部ではすごく広がって、S N S も広がってきているので。綺麗である必要はないと思います。
- ・生徒はどう考えているのかなというのを、保護者も知りたかったりと思うので、例えばそういった「英語の姉妹校でこんなことをやっています、こんな留学生が来てこんなことをやっています」とか、「地域の工場で、僕らも工場と一緒に入って、地域を活性化するためにやっています」といったものを大人目線じゃなくて、実際それに参加している子どもたちがメディアの発信者としてやれば、Y o u T u b e なんて僕もさっきの球根でもちょっと始めましたけど、1 個あったらできるので。それを全員に見てもらわなければならないじゃないですか、テレビみたいに。

- ・そこに行こうかなって思っている一部の保護者や、一部の特定者をターゲットにすればいい話なので、綺麗である必要ないと思います。
- ・むしろ深く掘り下げて、「この学校の中、どんなことをしているのかな」みたいな発信を、生徒自身がメディアになって、勉強だけじゃなくて、さっき言ったように。いろんな発信の中身は、それこそ学校の個性の部分はあると思うので。あるいは「この学校このスポーツを頑張っている」でもいいし。いろいろあると思う。
- ・「地域とここにつながっている」「英語でここの学校の留学生が来ています」とか、「こういうタブレット教育でつながっています」とか、あるいは中井先生がおっしゃった、例えば数学、「この学校、数Ⅰは一生懸命やっています」とか、「数学に一生懸命力を入れた学校です」とか、その学校の個性を生徒が発信する、その土台は作ってあげなきゃいけないと思いますけど、そういった生徒がメディアなのだっていう、その声を実は多くの方は、知りたいのではないのかなと思います。保護者も。
- ・そこに学校に行くかどうか、判断しようとしている生徒も、そういうところを見るのではないかなと思います。広報改革は、そういう視点も入れてもらったら。
- ・多分、大手の広告代理店とか、いろいろメディアのプロを入れると、結構お金はかかるけど、綺麗なのはできます。でもマスに対するものなのか。あるいは高校に入る、その一定の範囲は限られていると思うので、綺麗である必要はないと思います。
- ・お金のかけ方は、そちら側にした方がいいのではないかなと思うので、その視点を持った広報改革というのを、進めてもらえれば。生徒も自分たちが主役になったら面白いと思います。
- ・なので、そういった観点での広報改革もぜひ、やってもらえたらと思います。
- ・授業料の完全無償化もスタートしましたから、そういった意味で本格的に子どもたちが学校を選ぶ社会になってきます。
- ・そうすると公立も含めてですけども、やっぱり学校間で、ある意味その切磋琢磨というのをやりながら、この学校の魅力とか、学校の教育の質とか、学校の個性を高めていくということが、非常に重要になるし、僕は、それはむしろプラスだと思っています。
- ・一部やっぱり批判もされますけれども、学校自身が生まれ変わってよりよい教育を、ある意味選ばれた側になって、こういった教育を提供していこうじゃないかというのを、積極的に発信しなければならぬことは、僕はプラスだと思っています。
- ・もちろん、エンパワメントスクールとか、ステップスクールとか、そういった多様なニーズに応える学びも、これは求められていることだと思います。
- ・みんなが偏差値の高い学校、という必要なんか全然なくて、学校の個性や、公立学校としてのあるべきものとか、そういったものを学校ごとに追求してもらいたいと思います。
- ・今回の議題は、普通科の96校が特にメインですから、普通科の中でもやっぱり英語教育を、英語を通じた、自分を表現するというか、ちょっと殻剥けた積極性というか、これがこれからの社会には絶対求められると思います。
- ・ある程度そういった殻剥けて、会話できるかどうかというので、生涯賃金も圧倒的に変わるという分析もあります。もっともっとそういう社会になってくと思うし、その人の幅も広がると思います。
- ・なので、ぜひ僕は英語のコミュニケーションというか、それを、より普通科でも、特色を持ってやってもらえたらと思います。

- ・1 公立高校1 海外姉妹校制度、ちょっと考えてもらいたいと思います。

(司会・野村企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・本日、様々ご意見出ましたが、お時間も参りましたので、この辺で議論を終えたいと思います。
- ・最後に、本日の議論を通じて、コメントはよろしいですか。
- ・そうしましたら、これにて本日の意見交換を終わらせていただきます。
- ・本会議の議事概要は後日、大阪府ホームページに掲載予定となっております。
- ・本日は長時間にわたり、どうもありがとうございました。

以上